

巻頭言 「憐れんでください、神様」

宇野 元

「ペトロは、……外に出て、激しく泣いた」(マタイ 26, 75)。

イエスを三度、しらない、と否認した。あの男とはいかなる関係もない、と。この裏切りはだれにも気づかれないはずだと思っていた。しかし夜明けを告げる鶏の鳴き声が響くと、彼は自分の現実に向き合います。お前は、イスカリオテのユダに勝る者ではない！ 大粒の涙がこぼれました。

もう一人の福音書記者とも称される、ヨハン・ゼバスティアン・バッハは、「マタイ受難曲」において、この出来事に長いアリアを配置しています(第39曲)。

憐れんでください、神様
この涙のゆえに
ご覧ください、心も目も
御前に激しく泣いています

ヴァイオリンが奏でる美しい旋律に伴われて、アルトにより歌われます。一見強そうだった男の涙を超えて、「人間」の心の内面をみつめさせられるよう。そして、悔い砕かれる弟子の内面をこえて、私たち自身の心をみつめるよう導かれます。ペトロと私たちの人生が鏡のように重ね合わされます。

失敗。神と人にたいする負い目。しかもイエス・キリストの傍らに自ら立つ力はない。イエスを否認している。憐れんでください、神様。わたしはペトロに勝る存在ではありません！

この行き詰まりに出口はあるのか？ バッハはこのように答えています。唯一、残るものがある。神の憐れみをもとめる叫びが。そして神の答えは？ アリアに続けてバッハはキリスト教会の賛美を置きました。それは福音によって賜う静かな確信を表すものです。「わたしは咎を否みません。しかしあなたの恵みは罪よりはるかに力があります。絶えずわたしのうちにある罪よりも。」

この「しかし」に、私たちのよりどころがあります。私たちの失敗、悩み、悲しみは大きい。しかし神はそれよりも大きな方でいらっしゃる。その大きさは、高みにある偉大さではなく、咎ある私たちを顧みることのできる偉大さである。神は憐れんでくださる。ペトロを。私たちを。